

真に意味のある

「年間指導計画」の作成が

教師を変える, 授業を変える, 生徒を変える!

筑波大学附属中学校 教諭 肥沼 則明

はじめに

私が勤務している筑波大学附属中学校（東京都文京区）は、明治21（1888）年に高等師範学校附属学校尋常中等科（現在の附属高等学校に相当）として創設され、その後母体の学校が東京高等師範学校、東京教育大学と移り変わって現在に至っています。

本校の英語教育における特徴は、大正時代にかの Harold E. Palmer 氏が本校を *The Oral Method* の実践校として以来、英語を教える際に「聞くこと」「話すこと」を第一としてきたことで、時代の変化に流されずに首尾一貫した態度を貫いてきています。もちろん、ここ数年はコミュニケーション能力の育成ということを大目標にして指導に当たっています。

しかし、5年前のある日、教科会で「生徒は自分たち教員の願いどおりに力を付けているのか?」という不安にも似た疑問点が議論されました。もちろん、それまでもそれぞれの教員が独自の指導内容や活動を展開しながら成果を上げていましたが、3年間を見通したときに最終的にどのような力を付けさせて卒業させたいのかという点については、共通の見解を持っていなかったということに改めて気付いたのです。そこで、平成8年度から「3年間を見通した英語指導—『聞くこと』『話すこと』を中心として」という研究テーマを掲げ、英語科教員4人全員でそれに取り組むことになりました。そして、4年間をかけて『『聞くこと』『話すこと』を中心とした創造的な言語活動（3年間の指導計画）』を確立しました。

ここでは、その研究の過程で得られた成果や課題を“年間指導計画の作成”という視点から述べ、読者の先

生方が新年度の年間指導計画を作成する上での参考にさせていただこうと考えています。また、中学校あるいは高等学校の3年間を見通した指導を行うためのカリキュラム作りの視点も示したいと思います。

2 「年間指導計画」とは? 「カリキュラム」とは?

「年間指導計画」というと、なにやら1年間の指導内容に関して細かいことまですべて列挙しなければならないような脅迫観念に捕らわれます。

実際、毎年のように学校あるいは教育委員会に提出する「年間指導計画」には、「いついつにどこどこをどのように指導する」ということから、「観点別評価」やら指導上の留意点等、こと細かに記入することを求められるようです（実は、本校にもそのような「年間指導計画」はあります）。それだけに忙しい年度当初にそれを求められると、教科主任か誰かだけが代表して仕上げて提出し、あとは公開授業で指導案を書かなければならないときなどを除いて、誰も見ないし利用しないというのが実状のようです。

ところが、それをしてしまった時点でその学校の英語教育は進歩しない、というのが今回の話の出発点です。それだけ年間指導計画は大切であると考えています。

では、年間指導計画とは何でしょうか? わかりやすくするために英語に直すとするとどうなるでしょうか?

直訳すると *annual teaching plans* でしょうか? これでは内容を的確に表しているとは言いがたいですね。私がここで話したい年間指導計画は、*syllabus* と訳せるものです。Oxford の *Advanced Learner's Dictionary of Current English* (通称 OALD) では *syllabus* を



'outline or summary of a course of studies' と定義していますが、大切なのは outline という部分です。つまり、シラバスを作るということは、1時間ごとや1ユニットごとの細かい指導内容や留意点等を予めすべて示すことよりも、一本（場合によっては数本）筋の通った見通しを持つということなのです。

次に、「カリキュラム」ですが、これは年間指導計画より上の枠組みを指します。



中学校では、普通授業が週4時間あるとすれば、一般的にはすべて同じことを行う時間と捕らえられているのではないかと思います。ティーム・ティーチングが導入されてからは多少事情が変わりましたが、残りの時間を「普通授業」と呼ぶとすれば実質的には同じでしょう。しかし、このことについても検討の必要があるのではないかと本校では考え、メスを入れることにしました。そして、普通授業とは違ったねらいを持った授業を独立した存在として位置付けるようにしました。当然、時間割上もそれを明確にし、指導する教員も普通授業とは別の人間が当たるようにしました。これがここで言う「カリキュラム」の検討です。

3 「育てたい生徒像」の確立

年間指導計画の作成をシラバス作りと考えるならば、それは学校英語教育で言えば英語学習指導を通した教育目標を考えることになります。そして、長期的なスパンにおいては、中学校あるいは高等学校の3年間の指導を通して生徒にどのような英語の力を付けさせたいのかということを考えることになります。

言い方を変えると、卒業するまでにどのようなことをできる生徒にしたいのか、つまり「育てたい生徒像」を明らかにするという事です。このことはとても重要です。

〈表1〉「育てたい生徒像」とその具体的な姿

育てたい生徒像	具体的な姿
 1 「生きた」言葉で、コミュニケーションができる生徒	<ul style="list-style-type: none"> ・聞き手に伝わる話し方ができる。 ・伝えたい内容を、気持ちを込めて話すことができる。 ・話し手が何を言おうとしているか関心をもって聞くことができる。
 2 困難に対して臨機応変に、粘り強く取り組める生徒	<ul style="list-style-type: none"> ・課題に対して、よりよい発表をしようと工夫をすることができる。 ・理解できないことは、推測したり、質問したりすることができる。 ・既習事項を活用して、伝えたいことを表現することができる。

これをしっかりと考えてから指導に当たらないと、どんなに素晴らしい活動を実践しようと、それは「砂上の楼閣」あるいは「絵に描いた餅」になりかねません。なぜなら、最終目標を定めてから指導しないと、各指導が相互に無関係でバラバラな目標のもとに行われてしまい、結果として教師が望んでいるような総合的な力を付けさせられないからです。

さて、本校英語科が考えた「育てたい生徒像」は下記の〈表1〉のとおりです。これだけでは何をどのように指導するのかということとはわからないと思いますが、そのあとに決まる改善案（カリキュラム、指導計画、各活動）のすべての土台となっています。

4 改善案の検討

「育てたい生徒像」というのは、見方を変えると現時点で「育っていない生徒像」とも言えます。ただ、「育っていない」とは、必ずしもそれまでの指導がダメだということではありません。発展途上だからできないということもあるからです。

いずれにしても、目標を達成するためには、それまでの指導方法や指導内容を見直し、改善するべき所は改善していかなければなりません。

本校英語科では、生徒に確実な英語の力を付けさせるには、学習した言語材料を実際に使わせる機会を保證することが肝心であると考えました。もちろん、このことは現在では至極あたりまえのことと考えられていますが、「教えることがいっぱいあって、そんなことを行っている時間はない。」と考えられていた時代からすると、それは大きな変革でした。そして、それまで行われてきた指導を全面的に見直し、次の3点を改善案として提起し、試行してみることにしました。



真に意味のある「年間指導計画」の作成が教師を変える、授業を変える、生徒を変える!

① 従来の指導過程の中に発信型の言語活動をより多く取り入れる

先に述べたように、本校では70年以上も前から「聞くこと」「話すこと」を重視した指導を行ってきています。

また、授業は細かい指示等も含めてほとんど英語で進めています。しかし、*The Oral Method* に基づいた指導は、インプットに主眼が置かれており、学習した英語を実践的な場面で使う、つまりコミュニケーション活動を行う、ということは前提としていません。したがって、それまでの授業では、与えられた場面において自らの意志で発話をするという活動はあまり取り入れられてこなかったのです。そこで、毎回の授業の中に、ある一定時間、継続的に発信型の言語活動を位置付けようと考えました。こうすることによって、生徒は自らの意志で発話することに慣れ、力も付けていけるだろうと考えたのです。

② 題材や時期に応じて、既習事項を定着させるための創造的な言語活動を取り入れる

日々の授業において基礎的・基本的事項をしっかりと理解させ、徹底的に練習させることはとても大切です。しかし、それだけの繰り返しでは生徒が習った英語を思いきって実際に使う場面は限られてしまいます。

①で述べたような活動はそれを補うものとしてとても意義のあるものですが、生徒ひとりひとりがより自由な発想を生かして活動できるような場面を提供することも必要です。そこで、題材や時期に応じて、既習事項を定着させるための創造的な言語活動を年間指導計画に位置付けることにしました。ここでは、教科書の題材やその他の機会を利用して、費やす時間も準備もやや規模の大きな活動を行い、それまでに習った英語を総合的に使わせることを目指しました。

③ 総合的・発展的な言語活動を行う時間をカリキュラムに位置付ける

①、②に示したように既習事項を総合的に使わせる時間を確保してみると、学習活動を中心とした普通授業と並行して、総合的な言語活動を行う時間も独立して設けたほうがいいのではないかとということが議論されまし

た。このメリットは、学習活動の量に左右されずに確実に言語活動の時間が確保できること、比較的短いインターバル(週1時間なら1週間ごと)で繰り返しその活動を行えることです。もちろん、そのことによって普通授業の時間は確実に削られます。

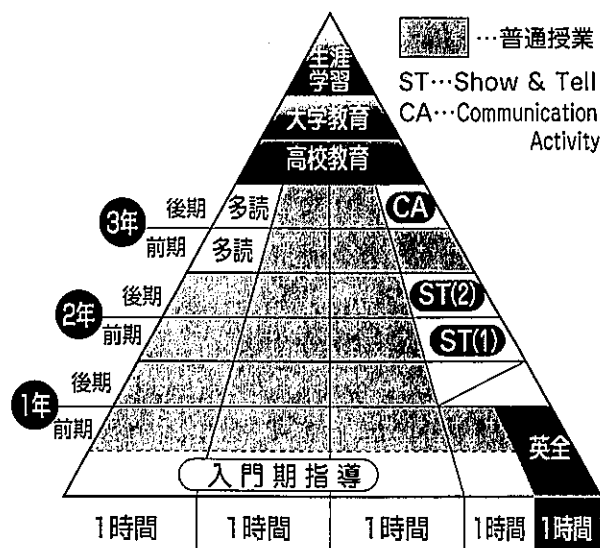
しかし、本校英語科ではそれを補っても余りある効果が得られると考え、そのような時間をカリキュラム中に独立した授業として設定することにしました。

5 カリキュラム改革と3年間を見通した言語活動の指導計画の作成

さて、「育てたい生徒像」も定まり、改善案の骨格もできあがりました。次なる作業は、それらを具現化するカリキュラムと指導計画の作成です。

まずは前節の③に当たる、3年間のカリキュラムの設定です。改訂の主旨はこれまでに述べたとおりですが、結果的にできあがったのは〈図1〉のとおりです。

〈図1〉平成8・9年度 英語科カリキュラム



1年生は、Palmer の *The First Six Weeks of English* (1929) に基礎を置く音声のみによる入門期指導(25～30時間)はそのまま継続し、その後は教科書の学習を中心とした普通授業を行うことにしました。また、できるだけ多くの時間英語に接させたい前期に「英全」とい



〈表2〉「聞くこと」「話すこと」を中心とした創造的な言語活動(3年間の指導計画)

…発展的活動の授業

…普通授業での継続活動

ST…Show and Tell **CA**…Communication Activity **WAI**…What Am I?

学年	第1学年		第2学年		第3学年	
学期	月	活動内容	月	活動内容	月	活動内容
前			6	教科書をもとにしたスキット作り ST (1)		
	7	教科書対話文アクトアウト発表会	7	NHK基礎英語スキット・コンテスト 課題スキット 公開録音	7	NHK基礎英語スキット・コンテスト 課題スキット 公開録音 スピーチとコメント
期	夏休み		夏休み	NHK基礎英語スキット・コンテスト 自由スキット作成	夏休み	NHK基礎英語スキット・コンテスト 自由スキット作成
	9	教科書本文をもとにしたスキット作りとコンテスト	9	自由スキット 公開録音	9	自由スキット 公開録音 スピーチと
	10	NHK基礎英語スキット・コンテスト 課題スキット 公開録音			10	小グループで行うスピーチ ディスカッション
後	12	台詞は教科書通りの英語劇 クイズショー WAI	12	創作部分を取り入れた紙芝居または劇 ニッポン紹介 ST (2)	12	ディスカッション CA
	冬休み		冬休み		冬休み	
期						
	3	教科書をもとにした物語作りとピクチャーカード紙芝居 クイズショー WAI	3	レポーター活動 ニッポン紹介 ST (2)	3	ディベート大会 CA

う校内テレビによる一斉指導を1時間加えて週5時間とし、後期を3時間にするという変則的な時間割を組みました(平成9年度まで)。

2年生は、普通授業のほかに週1時間はALTとのチーム・ティーチングで Show and Tell というスピーチ中心の授業を設定し、英語科教員4人全員で指導に当たることにしました。

3年生は、普通授業以外に後期週1時間はALTとのチーム・ティーチングによる Communication Activity

(CA) という時間を設定しました。また、卒業後の英語学習も視野に入れて「多読」という時間を設定し、人事交流を有効に生かして附属高校の教員にもお手伝いいただくことにしました。

このように、内容面、システム面ともに多様性を持たせるようにしたのは、中学校としては珍しいほうだと思います。

次に取り組んだのは、前節の①と②を指導計画上に具体的な形で位置付けて実行することでした(〈表2〉参照)。



①については、1年生では後期の普通授業で What Am I? という活動を毎時間の授業の最初に行うことにし、2年生では後期の普通授業で「ニッポン紹介」(平成9年度に私が担当したときの愛称は「古畑-コロombo」)という異文化理解を重視したショート・スピーチを行うこととし、3年生では前期の普通授業に毎時間ディスカッション(平成10年度に私が担当したときの愛称は「ディスカッション・タイム!」)を行うことにしました。個々の活動内容を紹介するのはスペースの関係で割愛しますが、いずれの活動とも生徒にも大変好評で、本年度まで継続して行われており、来年度も行われる予定です。

②については、「学期末スペシャル」と別名で呼ばれる「イベント学習」を題材や時期に応じて行うことにしました。

1年生では教科書を台本とした寸劇や紙芝居を行い、2年生は教科書をもとにしたスキット作りや創作部分を加えた劇や紙芝居を行い、3年生はディベートを行うことにしました。

また、3学年共通の取り組みとして、NHKの「基礎英語」スキット・コンテストに全校で応募しようと決め、それを1つの目標としてスキット作りに入力することにしました。①の場合と同様にここでは個々の活動の詳細は紹介しませんが、毎年少しずつ形を変えることはあっても、基本的な方向性は現在まで引き継がれてきています。とくに、スキット・コンテストはNHKの企画に応募すること以外に学級内・学年内選考も行うことで生徒たちの意欲を高めることに成功し、「育てたい生徒像」の1つ目の目標を達成するのに大きく貢献しています。

6 「年間指導計画」作成上の留意点

ここまでは、年間指導計画を作成する上での基本的な考え方を本校の実例を踏まえてお話してきましたが、ここからはそれを作成する上でぜひ押さえておかなければならない留意点を述べていきたいと思えます。

1. 「実質的」と「現実的」

先にも述べましたが、年間指導計画は実質的な内容にしぼって作成することが大切です。

管理職に指示されたから、すでに形式が決まっているからと、作成者側が十分に内容を吟味することなしに形式的に作成するのだけは避けたいものです。

その学校の英語科の教師が、自分の生徒の実態をよく理解し、彼らの英語の力を伸ばすために中・長期的な視点に立ってゴールを設定し、それを実現するための小さなステップを組むようにします。また、ほとんど実施する見込みのない内容をこと細かに作成することはあまり建設的とは言えないので、そのような年間指導計画は作成するべきではありません。それよりも、年間の、学期ごとの、レッスンごとの重点を決め、実現可能なことだけを厳選して示すようにします。

このようにして年間指導計画を作成すれば、それを常に参照しながら指導を行っていくことも容易になりますし、そうなれば作成する目的も明確になり、作成する際の意欲も格段に高くなります。また、そのようにして作成したものは、終了した時点での評価もしやすくなり、その結果として改善が必要なきもそれが容易に行えるようになります。

2. 英語科教員全員による共有

もう1つ大事なことは、「育てたい生徒像」や年間指導計画をその学校の英語科教員全員で共有することです。

仮に、どんなに素晴らしい「育てたい生徒像」や年間指導計画ができたとしても、先に述べたように一部の教員の考えでそれが決まった(いつの間にかそうなっていた)のでは、その学校の生徒は目標通りに育ちません。それは、英語科教員が1名しかいない小規模校は別として、3年間に生徒は同じ先生だけに教えてもらえるかどうかはわからないからです。そのときに、「私は、みなさんに英語の授業を通してこうなってほしいんだ。」というようなことが指導する教師によって違っていたら、生徒はとまどってしまいます。

個々の教師によって授業のスタイルや個性は違っていても、ゴールやそこへ至るまでのステップさえ共有していれば、生徒は教師の目指している方向に向かってくれます。

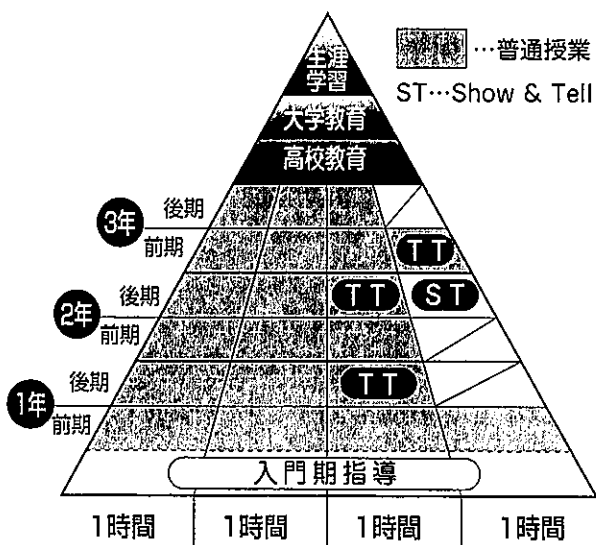


したがって、英語科教員全員で十分に議論して、ゴールや指導の重点に対するコンセンサスを得ることが大切です。

では、これらの点について本校英語科ではどのように取り組んだのでしょうか。

まず、育てたい生徒像を明らかにするために、平成8年の夏休みに教科会を開きました。すでにその年はスタートしていたわけですが、年度当初は忙しくて十分な議論をすることができず、そこまですれこんだというのが実状です。しかし、事前の宿題として各自が思い描いてきた「育てたい生徒像」を持ち寄り、これだけで朝9時から夕方5時まで議論をしました。その後、カリキュラムと「聞くこと」「話すこと」を中心とした言語活動の検討に入り、最終的にある程度の形が決まったのはまるまる3日間を費やしたあとのことでした。しかし、それだけにできあがったものに対する理解と“思い入れ”は全員でしっかりと共有することで、学年が変わろうと、誰が担当しようと、年間指導計画に示された活動は行っていこうという確認をすることができました。実際に指導が始まってみると、個々の教員の希望や行事その他の関係で、実施時期をずらしたり規模を縮小したりして行った活動もあります。しかし、年度ごとの評価をもとに小改訂を繰り返しながらも現在まで基本的な形は変わっていません(〈図2〉参照)。それは英語科教員4人全員で十分に議論をして作成したものだからです。

〈図2〉平成13年度 英語科カリキュラム(新)



実は、多くの学校で欠けているのがこの点ではないでしょうか。確かに、しっかりとした指導計画のもとに素晴らしい学習指導を行っている英語教師は日本全国に大勢います。

私は個人の関心事として「名人」と呼ばれている先生の授業を研究しているので、これまでに素晴らしい指導を行っていらっしゃる先生に大勢出会ってきました。しかし、残念ながら、そのほとんどの場合において、そのような指導を行っているのはその先生個人だけで、その学校の他の先生とは共有されていないという実態があります。これでは、生徒はその先生に習っているうちはよくても、次に他の先生に習ったときにはとまどってしまうでしょう。したがって、「どの先生に習ってもゴールは同じである」というシステム作りと環境作りを進めることが、今もっとも必要なのではないかと思います。

7 まとめ

最後に、まとめとしてここまでお話ししたことのキーワードを拾ってみます。

- ★「育てたい生徒像」を明らかにする
- ★ 改善の基本的方針を立てる
- ★ 実質的で現実的な指導計画を立てる
- ★ 英語科教員全員で共有する

以上のことを念頭に置いて年間指導計画を立てれば、その学校独自の真に意味のある指導計画が作成できるでしょう。そして、それは結果として生徒を大きく成長させる指導を行うことにつながっていくのです。「そんな悠長なことをやっている時間はない!」などという声も聞こえてきそうですが、その気さえあれば話し合う時間は確保できるはずですよ。

新しい学年が始まるこの時期に、ぜひ一度教科内で年間指導計画について徹底的に話し合ってみてください。

なお、文中で取り上げた各活動の詳細や本校英語科の実践は、拙著ホームページ

(<http://village.infoweb.ne.jp/~koinuma>)

で紹介していますので、そちらもご参照ください。